

どこにいても温かい心があった

——ヨーロッパ生活を振り返って思うこと

多くの方に助けられて過ごしたブリュッセルでの16年間は、
今でも忘れられない思い出である。

フレンズ帰国生母の会
西地佐和子

2回の赴任で合わせて16年間をベルギーのブリュッセルで過ごした。ベルギーは小さな国で、面積は九州よりやや小さい程度である。首都のブリュッセルにはEUの本部が置かれている。そのため外国人も多く住む。緯度は北海道より北の樺太あたりに位置するが、夏の平均気温は20度以上で、冬も氷点下5度を下回ることは少なく、暮らしやすい街であった。

異国の地で無事出産！

次女と三女はベルギーで生まれた。次女の時は、「初めての出産ではないのでなんとかなる！」と思っていた。予定日まで1カ月近いあ

る日の朝、腹痛を感じた。まだ日もあるので、夫には会社に行ってもらった。当時は携帯電話もない時代である。夫が会社に着くまで連絡はつかない。だんだんおなかの痛みが強くなり、これは陣痛？ 1人でタクシーを呼んで病院に行くことにした。しかし、2歳前の長女は連れていけない。予定日近くなれば、日本から母が応援に来ることになっていたが、まだその時期ではなかった。そこで、病院に行く途中で「娘を預けるのでみてほしい」と友人に電話をした。すると、彼女のご主人がまだ家にいるので、迎えに来てくれるとのこと。そして、そのまま一緒に病院まで連れて行ってくれた。通勤渋滞の

中、1度しか行ったことのない病院への道は不案内だったが、陣痛に耐えながらなんとかたどり着いた。私はストレッチャーに乗せられ、病院とのコミュニケーションは友人のご主人がとってくれた。そのご主人は危うく出産に立ち会わされるところであった。分娩室^{べん}に入ってから私の夫も到着、産婦人科の先生もバイクを飛ばしてやってきた。「さあ、もういいよ」と言われて、無事出産！

そんなドタバタの出産であったが、病院まで付き添ってくれた友人夫妻



2年に1度ブリュッセルの中心地にある世界遺産「グランプラス」(大広場)で行われるフラワーカーペット